報告 2014 年天文学会ジュニアセッションの報告

谷川 智康（ジュニアセッション世話人／三田祥雲館高校）

ジュニアセッションは 2000 年に東京大学で第 1 回が実施され 2014 年で第 16 回目を迎えた。図 1 に示すように参加発表件数は年々増加してきた。その原因として、この十数年でデジタルカメラの進化によって天体観測が身近になってきたこと、総合的な学習の導入で天文部活動以外でも天文研究が行われていること、そして第 10 回からタイからの参加が継続され参加者の裾野が広がって来たこと、探査機「はやぶさ」の成功により宇宙、天文に関心を持つ子供、中高生が増えてきた事などの要因が挙げられる。今回のジュニアセッションは、初めて日程を 2 日間とし 3 月 22 日、23 日に国際基督教大学（東京都三鷹市）を会場として行われた。

両日とも良い天気に恵まれた。特に著者含め西日本からの参加者は、東京の”青い空”に感動すると同時に、西日本の黄砂・PM2.5 汚染の深刻さを改めて認識した。ジュニアセッションの発表件数の増大に際し、日程を 2 日間とするか否か、についてはこれまでも何度か議論が行われてきた。またその内容についても口頭発表とポスター発表のどちらに重点を置くかも検討課題であった。今年、試験的に 2 日間実施に踏み切ることにした。

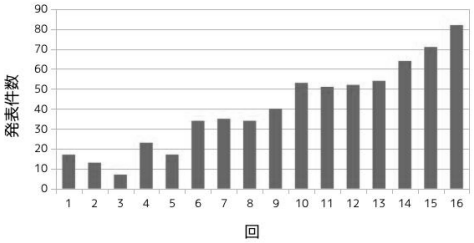

図 1　ジュニアセッション参加者数の変化

発表申込件数は 82 件と過去最高の件数となった。内訳は「夜空の明るさ」10 件、「太陽」8 件、「惑星」5 件、「流星」3 件、「小惑星」5 件、「銀河・銀河系」8 件、「タイセッション」7 件、「宇宙開発」7 件、「彗星」7 件、「月」4 件、「恒星」14 件、「星雲・星団」4 件であった。昨年末に話題となったアイソン彗星にまつわる発表が 3 件にとどまってしまったのはつくづく残念である。もっとも、アイソン彗星が消滅せず観測されていれば、発表件数も増大しこれで 1 セッション増える事態になっていたのは確実であろう。

図 2　大西浩次 実行委員長の開会挨拶

参加者の年齢層は 82 件中、小学生 2 件、中学生 8 件（中高生混合グループ含む）、残り 72 件は高校生の発表であった。2 日間実施としたが、発表時間の調整には困難があり、同一校から複数の発表があった場合には口頭発表を 1 件に絞るなどして、ようやく 1 件あたり 6 分間の発表時間を確保することができた。これは研究の口頭発表時間としては十分とは言えないが、例年の 2 倍近い時間を確保できその内容も動機→観測→解析→考察・まとめの流れがしっかりしていて、良かったと思う。

発表に対するコメントや質問については、時間的な制約もあるため、コメントシートを参加者全員に配布し、退場の際に受付で回収する形をとった。しかし、発表数が多いためか、コメントシートの記載がなかった発表もあった。また、年々発表数が多くなって、規模が大きくなってきたジュニアセッションであるが、聴衆の中の研究者の割合が以前より少ない感がある。特に近い距離でやりとりができるポスター会場に研究者の姿が少ないのは残念である。高校生が研究者から意見やアドバイスが得られる非常に貴重な機会であるので、研究者の方々にぜひ足を運んで頂けたらと思う。

図 3　高校生からの活発な質疑

今回、特にコメントや質問を多く集めた発表として、講演番号 6 番石倉彩美さん（群馬県立前橋女子高校）の「月の色の不思議　～なぜ、月の色は昼間は白っぽく、夜は黄色っぽく見えるのか～」が挙げられる。この発表には 43 件のコメントシートが集まり注目されたようだ。非常に身近なテーマに適切な仮説と研究手法で取り組んでいたので、聴衆の心を捉えたのだと思う。参加者数の点では今回も学会中最大のセッションとなり初日は、のべ 550 人、2 日間で、のべ 1000 人を超えた。今回踏み切った 2 日間の実施の成否については参加者のからのアンケートの集計を待って冷静に判断する必要があるが、口頭発表時間が確保されたことは非常に評価される点である。来年の天文学会春季年会 2015 年 3 月 18 日（水）～21 日（土）の日程で開催されるが、日程からジュニアセッションは 21 日（土）の 1 日開催で実施せざるを得ない状況である。開催形式については改めて議論の必要があるが、実行委員長を中心にスタッフ一同が協力しさらに充実したものを目指していきたい。

谷川　智康

＊　＊　＊　＊　＊